

おか え い せ き きんぱく お もくせいとうば
丘江遺跡出土「金箔が押された木製塔婆」説明会 資料

令和4年7月24日

公益財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

1 調査概要

調査原因 国道8号柏崎バイパス事業

遺跡名 丘江遺跡

所在地 柏崎市茨目・田塚3丁目ほか

調査機関 公益財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

遺跡の概要 丘江遺跡は柏崎平野の南西部に位置し、海岸線から約3km内陸に入った鯖石川左岸の沖積微高地に立地します。標高は現況で約7mです。調査対象地は国道8号柏崎バイパスの予定法線内、幅約80



～90m、延長約750mと広範囲にわたります。平成26年度から調査を継続しており、これまでの調査で遺跡の南側が鎌倉～室町時代の中世集落（居住域）、北側が水田域（生産域）であることが明らかになっています。

また、水田域の下から縄文時代後期の遺物、弥生時代や平安時代の遺構・遺物・流路などを確認しています。このほか、中世集落と重なるように江戸時代以降の集落を確認しています。

2 「金箔が押された木製塔婆」

塔婆とは 仏塔の一種で、日本に伝来してから形が変化していきました。平安時代に入ると五輪塔や宝篋印塔等の新種の仏塔が考案され、さらに木簡状に薄いものが登場するなど、用途に合わせて変化し継承されてきました。現在でも墓地に置かれています。塔婆は供養のためのものなので、供養に関わる一定期間が過ぎると廃棄されてきました。

丘江遺跡の金箔が押された木製塔婆 令和3年度の調査で、鎌倉時代から室町時代の畦畔の中に伏せられた状態で埋まっているのが発見されました。弥生時代の川跡の上に水田が作られたため、弱い地盤が沈むのを防ぐ目的で畦畔に芯材として入れられていたようです。左下欠損部に接合する小破片が出土したほかは、組み合わせになるような部材は出土していません。

材質はスギの柱目材、大きさは長さ123cm、幅19cm、厚さ2.3cm（上下・左側縁欠損）です。文様配置から、本来は幅21cm程度の板だったと推定できます。文様は中央に阿弥陀如来を示す種字「キリク」、その上下には天蓋・瓔珞（垂れ飾り）と蓮台が金箔押しで描かれています。文様のない下半部にはチョウナ痕を確認できます。上端は三角形を呈しますが、意図的なものではなく欠損による偶然の形状です。上端から約6cm下には、縦5mm、横4mmの楕円形の

釘孔が1つ残されています。その右側に縦3.5cm、最大幅0.9cmの楕円形の穴がありますが、人為的なものなのかは不明です。

表面の腐食が進んでいるため文様のすべてが残っているわけではありませんが、上端から14.7cmのところと62.1cmのところの2か所に横方向の^{かいせん}界線が引かれています。両界線に挟まれる空間の中央に種字が彫り込まれ、上下に天蓋・瓔珞と蓮台が配置されています。種字は浅めの^{やげんぼ}薬研彫りで彫り込まれ、界線・天蓋・蓮台は刃物による幅1mmに満たない浅い切り込みで描かれています。彫刻・線刻された文様の上に^{うるし}漆を接着剤として金箔が押されています。

放射性炭素年代測定は12世紀中頃から13世紀中頃という結果でした。

3 意義

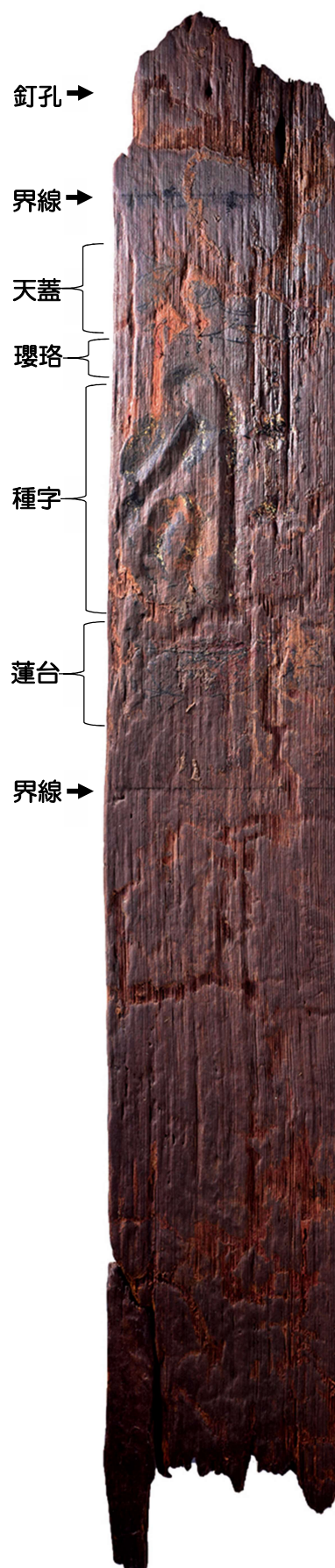
(1) 金箔の押された木製塔婆の例としては金沢市^{せんだきた}千田北遺跡があり、木製^{かさとうば}笠塔婆の種字に金箔が貼られています。

丘江遺跡の塔婆は、金箔が用いられたものとしては千田北遺跡に次いで全国で2例目となります。

(2) 種字に金箔を用いるという中央の先進的な文化や技術を複合的に取り入れることのできた有力者が、当時の柏崎地域にいたことを窺い知ることができます。

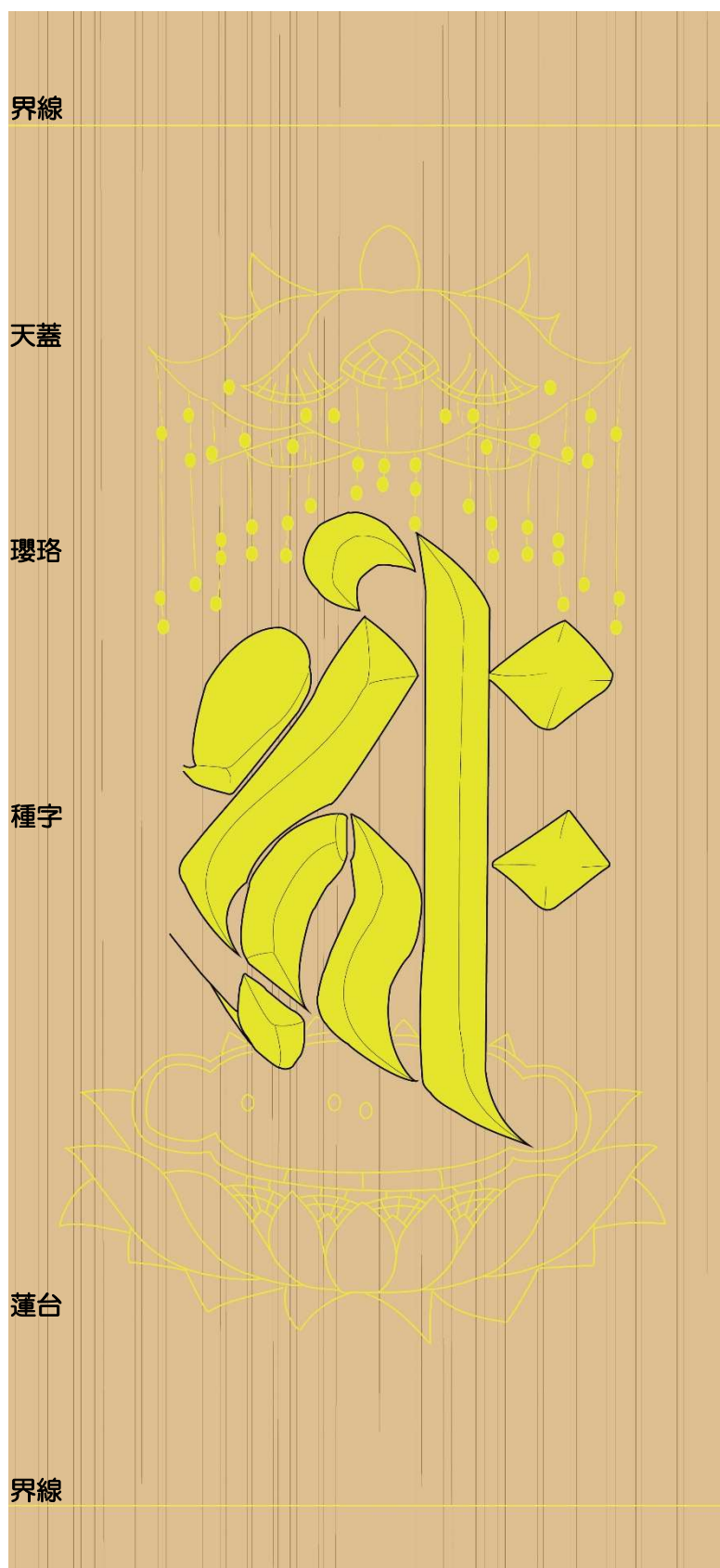
(3) 平安時代から鎌倉時代に遡る大型木製塔婆の出土事例はこれまで全国的に見ても自立するタイプのみでしたが、釘孔の存在から何かに打ち付けて用いるように、用途のうえで多様化の様相を見せ始めていることがわかりました。

(4) 塔婆は13世紀中頃には石製が主流となりますが、12世紀中頃から13世紀中頃に作られた丘江遺跡の塔婆はその前駆的位置づけとも考えられ、塔婆や葬送研究の上で重要な事例と言えます。



註) これまで当該遺物について笠塔婆として紹介してきましたが、検討の結果、笠塔婆ではなく塔婆として公開することになりました。

柏崎市 丘江遺跡出土「金箔が押された木製塔婆」



推定復元図

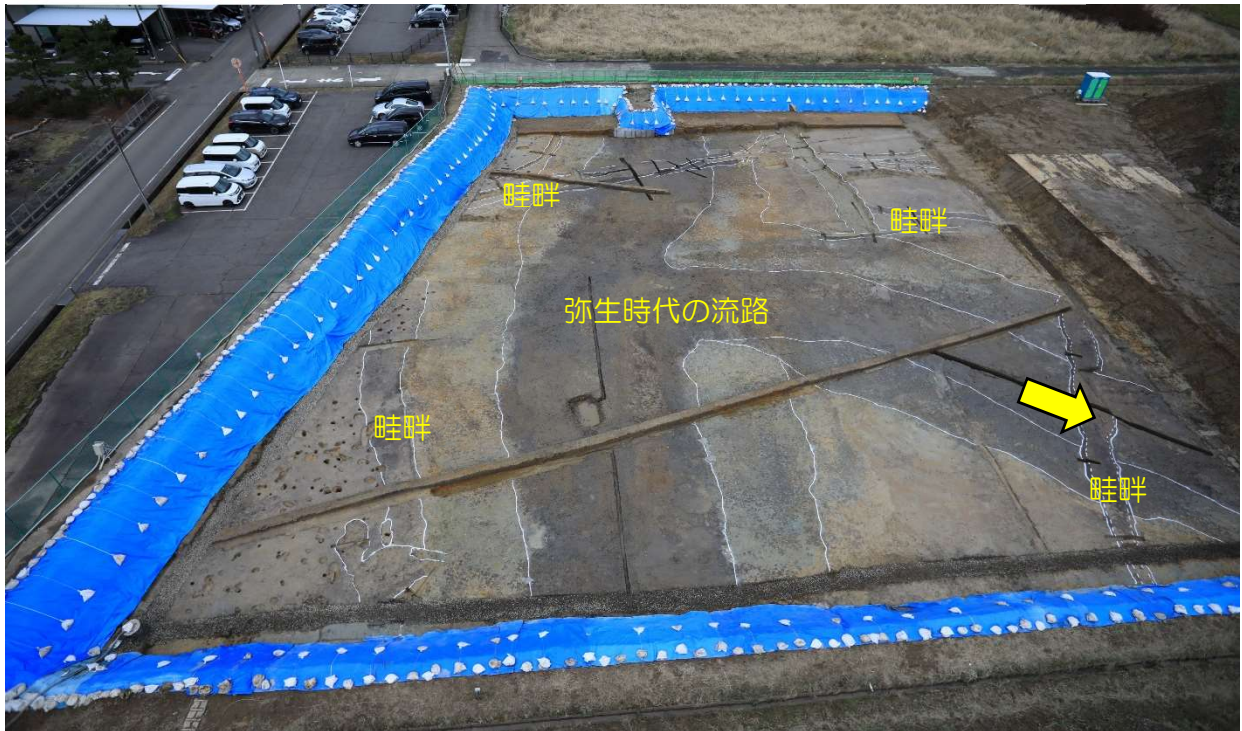
残存状態が良好な部分を反転、補足して推定復元しました。



界線内拡大写真

空中写真

北から。右下の畦畔から木製塔婆が出土（→の地点）。



出土状況写真

地面が盛り上がっている部分が畦畔。畦畔の中から出土しました。

